# 侍はこわい

司馬遼太郎

Shiba Ryōtarō

文庫オリジナル／時代小説短編集

光文社文庫

光文社文庫

文庫オリジナル／時代小説短編集
侍はこわい
著者　司馬遼太郎

2005年1月20日　初版1刷発行
2005年2月25日　3刷発行

発行者　篠原睦子
印刷　萩原印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Ryōtarō Shiba 2005
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73809-5　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

光文社文庫

文庫オリジナル／時代小説短編集

# 侍はさわい

江苏工业学院图书馆
藏书章

司馬遼太郎

光　文　社

侍はこわい　◎目次◎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

権平五千石　7
豪傑と小壺　35
狐斬り　69
忍者四貫目（しかんめ）の死　111

みょうが斎の武術　135
庄兵衛稲荷　179
侍はこわい　223
ただいま十六歳　253
**解説**　三好徹（みよしとおる）　285

権平五千石

# 一

長浜（ながはま）という町が、びわ湖の東岸にある。

天正（てんしょう）のはじめ、それまで織田（おだ）家の一将校にすぎなかった秀吉（ひでよし）が、はじめて大名になり、この湖畔に居城をきずくことをゆるされた。高は十九万石余であった。

にわか大名であるために、家来が要（い）る。

地元の近江（おうみ）をはじめ、秀吉の出身地の尾張（おわり）などから、郷士、浪人、百姓の子、などが風（ふう）をのぞんでやってきて、仕官を乞（こ）うた。親の筋目のいい者はいきなり石（こく）取りの将校として召しかかえられ、人品のあやしい者は足軽にされた。年が二十に達していなくて多少の縁故のある者は、

「台所で飯でも食いやい」

という待遇になった。秀吉の親衛隊将校の見習とでもいうべき待遇で、当座は知行取りではないが、将来合戦があったときにその才腕勇気を試（た）めされ、それしだいで将来どのようにでも出世できる、という待遇である。こういう仲間に、のちに大名になった者が多い。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

加藤清正、石田三成、加藤嘉明、福島正則。……

尾張の津島という在所から出てきた平野権平という若者もそうである。

「素姓は？」

ときかれたとき、

「父は尾張津島の在で浪人をしておりまするが、かつて津島の奴原に田を領しておりました平野入道万休と申しまする」

と、郷里を出るときさんざん教えこまれたとおりの口上を申しのべた。真赤なうそではないが、多少のうそはある。入道万休は父ではなくて遠縁にあたる。しかし国を出るときに当の入道様に了解も得ており、その程度のうそはたれでもつくことだから、たいしたことにはならない。

とにかく、権平は秀吉の出身地の尾張者である。それだけでも有利だった。

「台所で飯でも食いやい」

ということになった。

はじめて台所でめしを食ったとき、その仲間の乱暴さと汚なさにおどろいた。

しかしむこうのほうこそ、権平の垢光りしたような不潔さに驚いたらしい。権平はぼろのような麻布に古綿をずっしり入れたものに木綿帯を巻きつけ、半袴をはいていた。

「薄ぎたないやつだ」

と、みな声もかけてくれなかった。

やがて権平は、みなの素姓を知るようになった。もっともめぐまれているのは、於虎、於市とよばれている二少年だった。どちらも途方もない乱暴者だったが、みななんとなく遠慮をしてかれらを立てていた。

（いやなやつだ）

と、権平はおもった。

於虎は、加藤虎之助清正である。かれは秀吉と同国どころか、同村の尾張中村の出で、亡父は鍛冶屋だったという。母親が、たまたま秀吉の生母といとこになるというので、いまではいわば御大将の御一門というわけだった。

於市は、福島市松正則である。尾張清洲の桶大工のせがれで、これまた秀吉の亡父弥右衛門と、市松の養父新左衛門が、異父同母の兄弟になるところから、御大将のいとこにあたる。御一門といっていい。

もっともこのふたりは、それを笠に着て威をふるっているわけではない。もともとのうまれつきが派手ごのみなうえに、背骨が弾機でできあがっているほどに活気があり、みなを代表してさまざまな世話もする。みなに立てられているのは、いわばそういう質にうま

れついているのであろう。

権平は、逆だった。

眼鼻だちがしょぼしょぼして、声もちいさい。無口である。どちらかといえば職人肌の男で、細工ごとがすきだった。自分の刀は自分で砥ぐし、衣服の繕いも自分でするし、袴ぐらいは半日で仕立ててしまう。みなが輪になって酒をのんでいても、権平だけはだまっている。つい、無視された。

それでも、友達はできた。

孫六という男である。父は三河うまれだが一向宗に凝って尾張に流れてきたとき、孫六がうまれた。加藤孫六嘉明という。

孫六は親切な男だった。権平が無視されているのを見かねて、

「権平、おまえは陰気でいけない。唄の一つぐらい覚えて唄ったほうがよかろう」

と、手にとって唄を教えた。

孫六は、唄のうまい男だった。この孫六もごく平凡な、どれほどの器量があろうともおもえぬ男だが、唄のうまさと如才なさで、仲間の者から、於虎、於市に次ぐ位置として立てられていた。

孫六は、手にとって城下のはやりの唄の一つを教えてくれた。

新領主秀吉を礼讃した唄である。

秀吉様の御陣立て、
いさみ進める若武者の
紫あやの母衣かけて、テンテコテン
おん大将の御装束、
金糸赤地の鎧召し、
鎧召し
銀のかぶとの赤紐しめさせ、
朝日かがやき、海山も、
……

というもので、歌詞は際限もなくつづく。今日は犬上郡栗栖村の雨乞い踊のうたとしてのこっている。

が、権平には覚えられなかった。どう唄っても節がつかず、ずるずると水洟を上下させているような唄にしかならない。

「おれは今様や音曲はきらいだ」

と、やめてしまった。

孫六のほうは、社交家だった。於虎、於市のあとについて、どこへあそびにゆくのでも一緒にゆく。

（ああいう所が、あいつのいやなところだ）

と、権平はひそかに思っていた。

孫六は、忠告好きらしい。

あるとき、権平に「家来をもて」とすすめた。なるほど考えてみると、いっぱしの若衆どもは、みな御扶持（ふち）も貰わぬのに、一人か二人の小者を従えている。

「容儀のよいものだ」

と、孫六はいった。「それに身のまわりをさせるのに便利だし、いざいくさとなれば、二人三人がかりでやるから働きもちがってくる。ぜひ、召しかかえろ」といった。

「呉れてやる扶持がない」

と、権平はいった。

「御扶持のないのはみなも同様だ。そこは何とか、御米蔵番人と渡りをつけて、日に五合なり一升なりの米をかすめて小者を召しかかえている」

「それも面倒だな」

権平は、身のまわりは自分でやった。走りつかいなどは、孫六の小者に頼んだ。「猿、

猿」と孫六が呼んでこき使っている小者で、そのへんの農村からひろってきた子供である。

あるとき、猿は権平があまりに用を言いつけるので、

「わしはお前様の家来ではござりませぬ」

と、怒ってしまった。権平は用を言いつけても、物の一つも呉れてやらない。だから猿は、他の若衆の小者たちに、権平の悪口を言いまわっていた。「屁のようなおひとだ」と言っているようであった。「くさいばかりで田のこやしにもならぬ」という意味であろう。

そのうち権平の実弟で、長左衛門（ちょうざえもん）というのが、郷里をとびだして兄を頼ってきた。権平はやむなくそれを家来にした。

「権平はいじましい男だ。わが身の内を小者にしてこき使うか。あれでは、他日立身したとき、その弟をどう処遇するのだ」

と、於市の福島正則などが悪口をいっているということを権平は耳にした。

「弟を小者にして、なにがわるい」

と、権平は、相手が於市であるかのように孫六に食ってかかった。

「外聞がわるいだけだ」

と、孫六はいった。

「外聞など、どうでもよい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor